新年文芸

詩

ふたりの道を歩く

退職者　高椋龍生

ひところ
心臓病で悄気ていた
かあちゃんが
このごろ
三池闘争のころの元気に戻り
私のこころの中にあかりがともる

かあちゃん
人生の垢ば落とすとは
こりからバイ
じっくり腰ば据えてかかるバイ

人間らしく生き抜いて来た足跡ば
孫たちに残してゆくとはこりからタイ

ゆっくり　ゆっくり
ふたりの道ば
歩きつづけるバイ。

竹とんぼ

九分会(三川)　平田光男

二男が小学四年生のころ
竹とんぼを作ってやった
喜ぶと同時に
「お父さんも作りきったつか」
と大声で叫んだ

なぜこの子が
狂喜したのか
しばらくわからなかった
二男は裏の広場で
竹とんぼを飛ばし
走りまわっていた
私も一緒に
竹とんぼを飛ばした
「ぼく　竹とんぼは大工さんしか
作れないと思っていた」
と言った

ある日学校に大工さんが
来た時
竹とんぼを友達だけに作ってやり
その友達は竹とんぼを貸してくれなかった
たぶん欲しくて
くやしかったに違いない

その竹とんぼを
大切にしていた
その二男も
成人式を迎える。

俳句

四分会(四山)　村中利行

極月の反核平和の広場往きつ
ごくごくと寒の水ゆく坑夫の咽
遠くで砲声木枯しがうれしそう
時雨いき薄暮の駅へ解かす肩
回転木馬冬ざれの野の風に駈け

退職者　谷口周

霧に点滅硬岩捨ての灯か漁火か
風の燈台悴えきれずに雪こぼす
「緊急失対」土工で終る日記買う
浚渫船へ鉱山から雪と風小僧
熔接の鉄面の凝視年金凍る

退職者　高椋龍生

泣き初の双子の一人笑ひ初
坑帽を飾りて家の宝とす
愛(あ)しけやし笑みのこぼるる春着妻
偕老の妻より受くる御慶かな
年玉をもらふ目付きとなってをり

雑詠

退職者　松永一郎

たたかいの思い出残る定年日
明日からはスクラム固く特組員

短歌

十二分会(三川)　町佳郎

わが生の証しとも日々に詠みつぎし歌数(す)百読み返す大晦日の夜
新年に祈願(ねが)わんひとつからどちのまずしくもつつがなき日々の明け暮れ
その妻のなきを淋しみ子ら寄せて屠蘇酌み唄いいし亡父のまぼろし
満ちてくる希望のごともさえざえと稜(かど)昇りくる浄き光の
足踏みをなしたるのみのひととせかと除夜の鐘聞くひとりの部屋にいんいんと鳴る

枯葉の季

退職者　木村守

畑はさみならぶ隣りは何時も留守梅の枯葉がゆっくり落つる
今年また庭木の一本に鋸入れ池埋めて芝敷きつめてゴルフ場企業は日本の地形を変つる
おお寒う枯葉の色を垂れさせて落葉木(ぼく)は朝をうごかぬ

爆発の日は遥かにてCOの裁判は続く長き闘い
蒸風呂の如き地底に差別受けしこと思い出す眠れざる夜は
海苔船のもやいし河口潮満ちてハゼ釣る児等の憂いなき顔
防人が佗しく住みし能古島の磯伝いゆく孫に遥れつ
資本家の飼はれし犬か何故に真実を売る無知な弁護士

退職者　高椋龍生

飾りたる三本線の坑帽に六十七歳の年明けにけり
アルバムを繰りつつ三池闘争を孫に語る日いつかあるらむ
うつくしく妻老いにけり遠き日の三池闘争忘れし如くに
坑帽の三本線ありにけりいたわる如く餅を飾りぬ
人生の垢落とす如ひそやかに世の隅に生きつづけ歌詠むる

遺族　永江美由紀

新年のあいさつをしてしみじみといつまで若き夫の遺影に
さんさんと朝の太陽ふりそそぐ公判の道きびしくつづく
むさぼりて密吸う蜂のみじろがず森閑と陽にさざんかの花
子を育て苦し家計をまもりぬく共働きもまた楽しきに

退職者　中尾種夫

肥後狂句

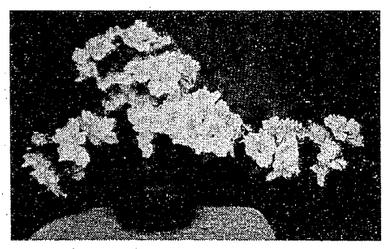
十五分会(三川)　佐藤勉

よか連合い失うて知る有難さ
やめらした脳の退化も知らんでにゃあ
記念の木もうその花もうば桜
むくれとる十日も肌にふれとらん
見えん万歳の時にゃ居らしたが

園芸随想

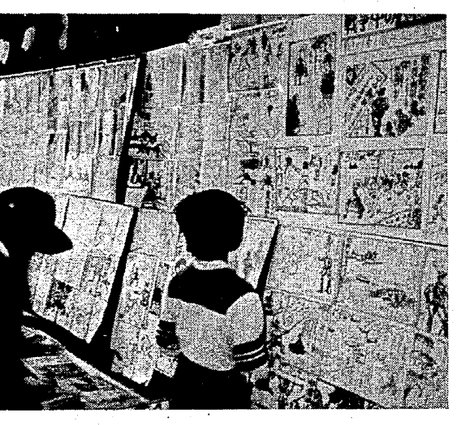
感動と羨望

十四分会(三川)　田上勇



田上さんが作りあげた、さつきの一鉢。田上さんは、さつきだけで百五十鉢ぐらい、他の盆栽を含めると三百鉢にもなるという。

五月末の気持ちよく晴れた朝、繰り込み前のふざけ合う時間に仲間の一人が、「田上さん、八女の広川にサツキの古木を持っとる人がおらすげなが知っとんな」と聞かれたが思いあたらず、「上内と違うな」と問い返す。「うんにゃ違うばい、新聞にのっとったばってん、四国で原木の古かつぼ集めてきとらすとげなばい。見にくる人は自由にさて下さいと書いてあったバイ」と知らしてくれた。そしてその人はサツキよりパチンコの方が趣味に合っている人である。「ああそうな近かうち行ってみらんならいかんな」と思い、そういっ



日、高槻市の小学校の文化祭で展示された、体験マンガ〟に見入る子供たち。

随筆

私の戦争体験マンガ

退職者　緒方進

文化祭の名のとおり、絵画・写真・書道・手芸・生花・イラスト・盆栽・押絵・焼物など、いろいろな作品が各教室と廊下いっぱいに展示され、中にはプロ級の作品もあり感心させられた。

一小学校区でこんなに優れた作品が展示されたのは初めてだと、世話役の人たちも驚きとともに喜んでおられた。

「先生の『戦争体験マンガ』がものすごい評判ですよ」「あれだけの量をよく書きましたね」と、PTA母親学級の人びとから声をかけられ、講堂で催し物を見ていた方々の視線が集まり、少々照れる。

実は、昨年手作り賀状の講習会で講師をしたときの皆さんから「昨年ちょっと見た『戦争体験マンガ』をぜひ展示して……」と要請され、準備するが大変だとは思ったが、最近の右傾化に危惧の念もあり心よく承知した。

八年前にマンガを書き、政治マンガなど三百枚を勤務先の大阪高でも「よか」と聞くと出かける性分である。しかし、こんなサツキは今までに見たことがなかった。

何百年も過ぎたであろう見事な古木で風雨にさらされた自然の枝ぶり、これぞ盆栽の妙味、芸術かと、その風格につくづく感じ入った。

「お宅はどちらからおいでになりましたか」と、愛情豊かな八女言葉。「はい、実は新聞で知り、あっちこっち突きあたりながら見せてもらいにきました。今日はきてよかったと思います。頭の中がスーツとしました」「それはそれは、遠い所から大変でしたね。実は私、四国におりまして今年はじめにこちらにきました。まだ知らない人が多く、この裏の人も昨日はじめて知ったといわれました」とのこと。

中野さんは建設省の砂防工事の仕事をされ、四国での永い生活のあいだに、「農家の片隅にあったサツキの古木を集めているうち、こんなになった。自分なりに作っているのでたいした物ではないが」と、見事な作品の割には大謙遜である。

毎年いろんな展示会を見てきた私も、比較にならないすばらしい感動と羨望の入りまじった気持で中野さん宅を後にした。

そして三十日の友人の引越しのあと五人、三十一日の時限ストのときは職場の仲間六人、むりやり誘って訪問。みんな感激の態。ある人は、「サツキを見直した」と洩らしてくれた。記念に変り鉢を一鉢もらい大切にしている。

『切り斬首』『初年兵の銃剣刺殺、初験』など、「本当にあったのか」と質問が集中したのを思い出す。

体験または見聞した人もいると思うが、敗戦の被害者の悲惨とともに加害者としての侵略戦争の事実も正しく伝えるべきだと思う。

展示に当たっては、少しでもわかりやすいようにと心がけ、見出しや説明文をマジックで青地に白抜き文字で書く。

十一月十四日の文化祭前日まで、手作り賀状の原画書きや、三池からの旅行団との交流など多忙な時期だったが、連日朝の一時ごろまで模造紙十一枚に、八十七枚の『戦争体験マンガ』を〝外地軍隊篇〟〝内地軍隊篇〟〝銃後(?)篇〟にわけて貼り、一週間ぐらいでできあがりほっとする。

枚方にいる次女や三女は、「子供も孫も学校に関係がないのに」と、現代的な割り切り方をして、〝変っている〟と笑っている。

今回の展示では、戦争でいちばん悲惨な目にあった被害者、母親である女性、そして学童たちが見入っている姿を見て、「ふたたび戦争や徴兵制を繰り返すな」と心で叫んだ。前三回に比べて、ぜひ見てもらいたい人たちだった。

八年前に書いた動機は、自衛隊の軍備強化など、昭和七、八年ごろの右翼化の雰囲気に似ていると危惧したことから、通勤電車の中